報告二

近世山間村落の景観と生業

―宝永噴火からの復興過程を中心に―

桐生海正

はじめに

筆者は、宝永四年（一七〇七）の富士山噴火（以下、宝永噴火）と山間村落の復興過程について、別稿で検討したことがある。[1] その中で、取永で比較した場合、噴火から復興までおよそ一〇〇年を要したこと、噴火以降土地生産力がなかなか回復しない中で、とくに東山家（ひがしやまが）一帯の山間村落は「薪商売」に活路を見出したことなどを明らかにした。加えて、入会山という「場」をめぐり、復興過程の異なった「山元」と「里」の村々双方の軋轢が表出したことを指摘した。

本稿では、先の検討が文字資料を中心とした分析であったのに対し、絵図資料も分析対象に加えることで、文字資料のみでは明らかにし得なかった噴火からの復興の様相を視覚的にも検討したい。文字資料と絵図資料を組み合わせることで、複層的な噴火の復興過程を描き出したい。検討を通して、噴火からの山間村落の復興がどのような景観変容を伴い進展したのか、その中で村民の生業活動はどのように景観に影響を与えたのかについて明らかにしたい。[2] 火山学の見地からも歴史学的な噴火研究への期待が表明される中で、[3] 今後いつ起こるかわからない噴火災害と被災村落の復興過程の分析は現代的な問題関心とも合致するだろう。

ここで、先行研究について整理しておく。まず宝永噴火に関連する絵図の分析を行った研究として、小宮雅明は、宝永噴火それ自体を描いた富士山の絵図を詳細に分析した[4]。また、大邑潤三は駿州駿東郡萩原村絵図を基にＧＩＳのジオリファレンス（幾何補正）機能を用い、「砂埋」の場所や立地を分析した[5]。宝永噴火に関する先行研究においては、本稿で検討するような被災村落の景観変容に迫った研究はほとんどなされて来なかったといってよいだろう。次に近世の山間村落や山地の景観に関する先行研究を挙げる。近世社会の景観について検討した代表的な論者に水本邦彦がいる。水本は、近世の人びとは全国各地で山焼きや樹木伐採を通して木山への遷移を押しとどめ、草山・柴山状態を維持していたことを明らかにし、その背景に膨大な草肥需要が存在したことを指摘した[6]。本稿で検討する地域では、早田旅人が水本の論を前提に、相模国の丹沢山地を分析した。その結果、同地では現代と比較にならないほど広大な草山が広がっていたことを明らかにした[7]。米家泰作は、歴史地理学的な手法から近世山村における生業と環境利用のあり方を追及した。とくに本稿との関わりでは、山村絵図の作成の際に描き手の空間認識を検討した点は重要である[8]。吉田ゆり子は、信濃国伊奈郡和田村を事例に、村絵図や百姓山の立木伐採をめぐる争論絵図の分析から山間村落の景観を描写した[9]。一方、後藤雅知は、下総台地の丘陵地に存在した村を事例に、入会野が村の近傍にあったことで、村内の山が草山ではなく林として維持されたことを明らかにした。さらに、江戸での炭薪需要が村の景観に影響を及ぼしたことを指摘した[10]。本稿でも検討する景観と生業について論じた重要な成果といえる。

先行研究を通じて浮かび上がってくる課題も指摘しておきたい。一つは、宝永噴火後の被災村落に関わる絵図を時系列で分析する必要性である。村が復興していく過程でどのように被災村落の景観は変容していったのか。時間軸で長期的なスパンから一地域を俯瞰できる歴史学の特性を活かしつつ、視覚的に被災村落の景観変容に迫りたい。もう一つが、山間村落における草山・柴山の利用実態や生業との関わり、それに伴う景観形成についてである。近世村落の景観分析により、マクロな視点で全国の山地が草山・柴山化していた実態が解明されてきた。草肥や秣の採取先として、草山・柴山の利用が考えられ、それに伴う景観形成が論じられてきた。本稿では、山間村落の山地利用の実態を見ることで、草肥・秣採取に限らない山地利用のあり方やそれに伴う景観形成がなされていた可能性を探りたい。

本稿が研究対象とする主な村落[11]は、相模国足柄上郡（神奈川県）の菅沼（かやぬま）村[12]、虫沢（むしざわ）村[13]、中山（なかやま）村[14]、宇津茂（うつも）村[15]（以上、松

田町）、皆瀬川村[16]（山北町）等の山間村落である。入会山を巡る区分としては、山間村落である萱沼村、虫沢村、皆瀬川村等が「山元」、平野部の村である金子村[17]（大井町）等は「里」もしくは「里方」と呼称されていた。

一　宝永噴火直後の山間村落

1　宝永噴火以後の概略

まず宝永噴火以後の研究対象地域の概略を述べていきたい。宝永四年（一七〇七）一一月二三日、富士山が噴火した[18]。噴火は同年一二月八日まで続き、足柄上郡周辺の村々には大量の火山灰が積もった（資料では「降砂」と書かれることが多い）。四〇cmから七〇cmほどの火山灰に埋もれ、困窮した村々は所轄の小田原藩に対し、救済訴願運動を行った。

翌宝永五年（一七〇八）に小田原藩領の被災地域一帯は幕領に上知されるが[19]、火山灰の河川流入により、足柄平野中央部を流れる酒匂川の河床が上昇し、噴火の二次災害である河川氾濫を招いた。氾濫は宝永期から享保期にかけて度々起こり、これによって河川周辺の平野部の村々はさらに困窮を極めていった。被災地域の内、酒匂川右岸や今回取り上げる山間の村々は延享四年（一七四七）に、酒匂川左岸の村々は天明三年（一七八三）に小田原藩領に戻された。

2　山間村落の様相

次に本稿で主に扱う山間村落の噴火直後の様子を見ておきたい。

まず、宝永四年（一七〇七）一二月の萱沼村の状況を見る[20]。萱沼村は、田方は「年々川成」で、畑方のみの村落である。その畑方に一尺五寸（約四五cm）の火山灰（砂）が積もった。掘り返しに必要な人足は、六六二八〇人と当時の萱沼村の村民数二〇八人の約三一八倍で見積もっている。富士山の宝永噴火口から直線で約三六km離れた村落でも想像を絶する被害を受けた。

次に中山村の宝永六年（一七〇九）五月段階の畑方（中山村に田方はなし）の復興状況を見たい[22]。中山村では、上畑・中畑、下畑、下々畑の順で再開発が徐々に進んでいった。しかし、再開発が進んだからといって、以前の土地生産力を回復できたかというとそうではなかった。宝永二年（一七〇五）から文政三年（一八二〇）までの中山村の年貢割付状を分析すると[23]、再開発が進展しても、容易には以前の土地生産力に回復し得なかったことがわかる。例え火山灰の除去（砂除け）が完了したとしても、火山灰を含んだ土壌は以前のような土地生産力にはなかなか戻らなかったのである[24]。噴火前の総取永の最高水準に再び達するのは、文化四年（一八〇七）を待たねばならなかった。取永だけ

で考えても復興には噴火から一〇〇年もかかった。

次に皆瀬川村についてみたい。宝永七年（一七一〇）、皆瀬川村と近隣五か村が田畑の再開発のために「砂はき料」を求めた訴状では、田畑と屋敷の廻りが三尺（約九一cm）ほど砂埋りになり、「餓死或ハ住宅砂ニ埋り水ニ流し亡滅仕候者相半ニ而御座候」という凄惨な様相であったことを訴えている。[25] 皆瀬川村では村民六一六名の内、「砂以後他所へ奉公ニ罷出申候者」が一七三名、「村々有人」が四四三名で、村を出て他所へ奉公に行く者も村民のおよそ三分一程度いたという。[26] 噴火は皆瀬川村民の生業にどのような影響をもたらしたのだろうか。資料には、「小百姓有之者共前々ゟ山稼又ハ野山ニ諸作少々仕付渡世送来候得共、去年之不作にたくわい茂無御座候、殊更去冬石砂降り候以後者、山稼も不罷成候而及飢候」[27] とある。噴火前、村民は炭焼きや薪取りなどと考えられる「山稼」や焼畑と考えられる「野山ニ諸作少々仕付」に従事していた。しかし、噴火後は「山稼」や焼畑もできない状況になってしまったことが記されている。

噴火直後の山地の荒廃状況は、周辺村落の資料にも散見される。例えば宝永七年（一七一〇）の資料では、「砂地故野山ニ馬草はえ不申、牛馬飼料并ニ田畑こやしニ難儀仕候」とある。[28] 降砂により、下草が生えず、家畜の飼料や自給肥料に苦慮する様子がうかがえる。また、「百姓かせぎ商売ニ参候深山之薪真木山へ砂故人馬之道路留り、かせぎ不罷成、難儀仕候」と、火山灰が積もったことで山地への通行が遮断され、薪取りもできなくなってしまったと窮状を述べている。

このように、噴火の被害を受けた山間村落では、穀物生産を可能とし生命の維持に欠かせない田畑の再開発を急ぐ一方、生業との関わりでは、山地に大量の火山灰が積もったことで、「山稼」や焼畑などがすぐには行えない状況に陥っていたと考えられる。

こうした噴火直後の山間村落の景観は、村々が復興へと歩みを進める中で、どのように変容していったのか。以下では、山間村落の景観変容の様相を絵図の分析に寄りながら迫っていきたい。

二　絵図から見た山間村落の景観変容

1　噴火直後の山間村落の景観

ここでは、それぞれの村落に残された絵図を主な分析対象とし、被災した山間村落がどのような景観変容をともないながら復興へと向かっていったのかを見ていきたい。[30]

最初に噴火から一二七年後の天保五年（一八三四）に作

成された皆瀬川村絵図（【絵図1】[31]）を見たい。この【絵図1】は、皆瀬川村の村絵図の中でも彩色豊かに村の景観を示す好資料である。もちろん噴火前と噴火後では、村の内実は異なるが、「平常」の村の景観を端的に示す資料といえる。皆瀬川村は、本村（「鍛治屋敷」）と「深沢」「高杉」「人遠」「八丁[町]」「市間」、ここには文字の記載はないが「中尾」「湯ケ沢」の各枝郷が山中に点在した。屋敷の周縁部には畑が同心円的に存在していたこともわかる。また、深沢集落等を流れるとちや沢や八町集落等を流れる皆瀬川沿いには田が散在した。周囲を山地に囲まれた典型的な山間村落の景観を呈していたといえよう。

皆瀬川村は宝永噴火によりどのような景観の変容があったのか。次に噴火から三年後の宝永七年（一七一〇）作成と思われる皆瀬川村絵図（【絵図2】[32]）を見たい。

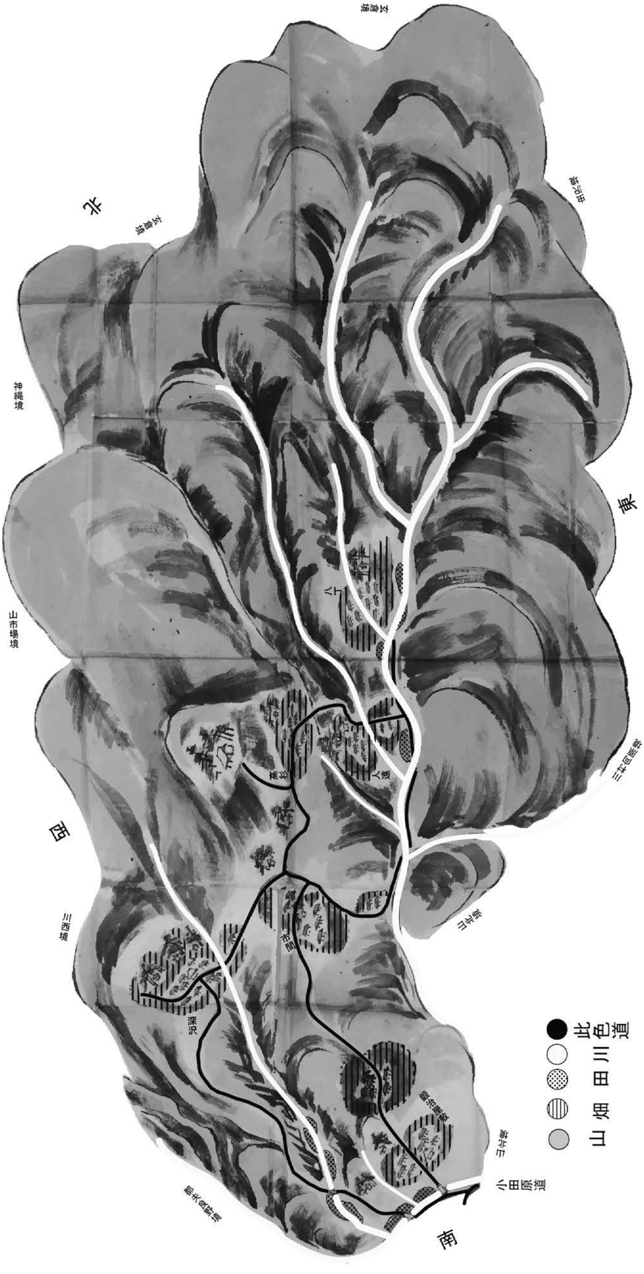
従来、神奈川県西部の噴火直後の村絵図として宝永五年（一七〇八）の柳川村や菖蒲村の絵図[33]や宝永六年（一七〇九）の苅野一色村の絵図[34]などが知られているが、それ以外は先行研究でもほとんど紹介されていない中で、噴火直後の村の様子を示した貴重な絵図である[35]。

絵図には、枝郷「八丁[町]」付近に「皆瀬川通此所御川除奉願上候」と二か所付箋での記載がある。宝永七年（一七一〇）に皆瀬川村役人が「川除御普請」を願い出た証文が残っており[36]、「皆瀬川筋或ハ坂橋沢両所沢水□□（虫損）損シ家□□（虫損）勿論前々ゟ有来候田畑共ニ皆損シ」たため、長さ四三〇間（約七八二m）余りの川除土手と長さ四〇〇間（約七二七m）の石倉の普請を願い出ている。付箋の内容と証文の内容が一致するため、提出した証文に添付された絵図の写しと思われる。絵図に作成された年代は記されていないが、証文と同時に作成されたものと推定した。領主に窮状を訴えるために作成された意図があるため、絵図を読み解く際に一定の留意が必要となる。

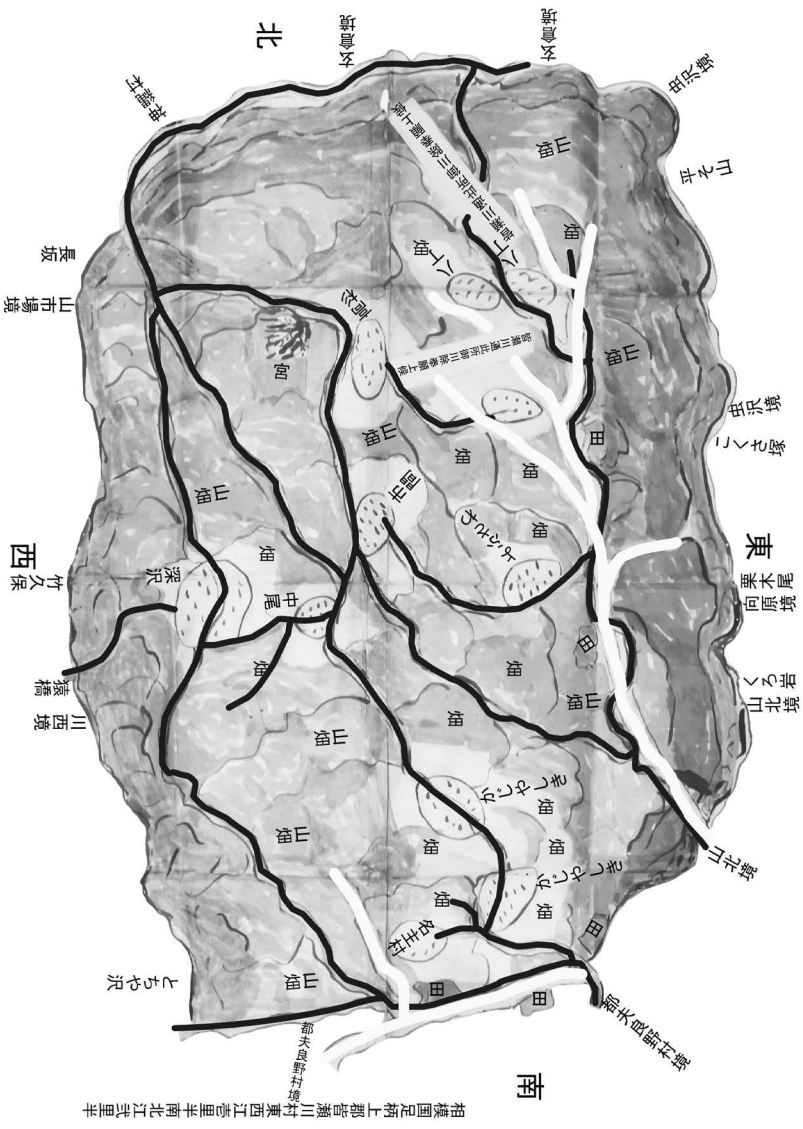
改めて絵図を見てみよう。噴火があり、皆瀬川村は一面黒灰色の世界となったようだ。「田」、「畑」、「山畑」のほとんどが火山灰で埋り、村は壊滅的な打撃を受けたことがわかる。ただし、注目すべき点もある。一つは、道の復旧である。絵図には、本村である「かじやしき（鍛治屋敷）」と「よふさわ（用沢）」「市間」「高杉」「八丁[町]」「中尾」「深沢」の各集落が書き上げられている。そして、そのいずれもが道でつながっている。噴火直後、必要物資を運んだり、情報を収集したりするために欠かせない道は、早急に村民の努力によって復旧されていた。

ただし、この年の五月に皆瀬川村他の奥山家（おくやまが）往還筋の九か村[37]が、「雨ニ而山ゟ石砂落候故、通路不罷成候ニ付」、石や砂を取り退け、道を元通りにするよう要求している[38]。皆

絵図１



絵図 2



瀬川村も五七八間（約一〇五〇m）、一五一人分を要求していることから、噴火後の道の復旧工事も一進一退を繰り返したようだ。噴火後の村の復興を考える上で、道の復旧は最重要課題の一つであった。

なお、道には、生活物資運搬等との関わりとともに生業との関係も見えてくる。皆瀬川村では、噴火直後、田畑の再開発とともに焼き出しておいた炭の輸送が企図された。宝永四年（一七〇七）一二月に、炭の輸送路の変更願が皆瀬川村から出された[39]。従来、枝郷の市間・湯ケ沢・高杉・人遠・八町は遠回りとなる本村鍛冶屋敷経由で、河村関所を通り、十分一銭（通行税）を納め、近隣の川村山北に炭を運搬していた。しかし、噴火後、「道罷留候」状況になったため、「少々宛持候炭」を皆瀬川通り経由で、川村山北まで出したいと要求した。これは川村関所を通過せずに炭を出すことができるルートで、従来許可されていなかったが、緊急事態であるため、許可されたようだ。さらに、宝永六年（一七〇九）一二月にも「往還之道大分砂降り御座候故」、高杉と八町の古釜で焼いた炭を皆瀬川通り経由で輸送したい旨を川村関所に対して要求した[40]。加えて、支配代官の伊奈半左衛門役所に対しても同様の要求を行った[41]。同文書では、「今年川除御普請御座候内者炭焼不申候得共、御普請も無御座候ニ付、少々炭焼申候」と賃銭のもらえる川除普請[42]で喰いつなぎ、そのあてがなくなったところで、炭焼きを開始したことが記されている。この要求も、翌宝永七年（一七一〇）四月に伊奈半左衛門役所役人より「炭商売」が許可された[43]。道の復旧は生業との関わりにおいても重要だったのである。

【絵図2】で注目すべき二点目は、畑の再開発状況である。よく見ると、集落の周りは黒灰色に塗られておらず、集落の周りから徐々に畑の再開発に努めていたことがわかる。ただし、隣村の都夫良野村の資料[44]には、「田畑之儀も山附ニ御座候得者、少々宛砂取申候得而茂、山嶽ゟ落掛、右之砂ニ罷成、難儀仕候」とあるように、田畑の再開発では、砂を除けても再び山地から落ちてくるということを繰り返し、山間村落ゆえの難しさもあったようである。

三点目は、村の総鎮守である「宮」（神明社）が描かれていることである。こうした「宮」が未曾有の巨大災害の中で村民の精神的な支柱として機能したことは想像に難くない。このように壊滅的なダメージを負った山間村落であったが、徐々に復興へと歩みを進めていった。

2　噴火から復興する山間村落の景観

噴火からおよそ二〇年から三〇年経った山間村落はどのような様相を呈したのか。まず、噴火から二一年後の享保

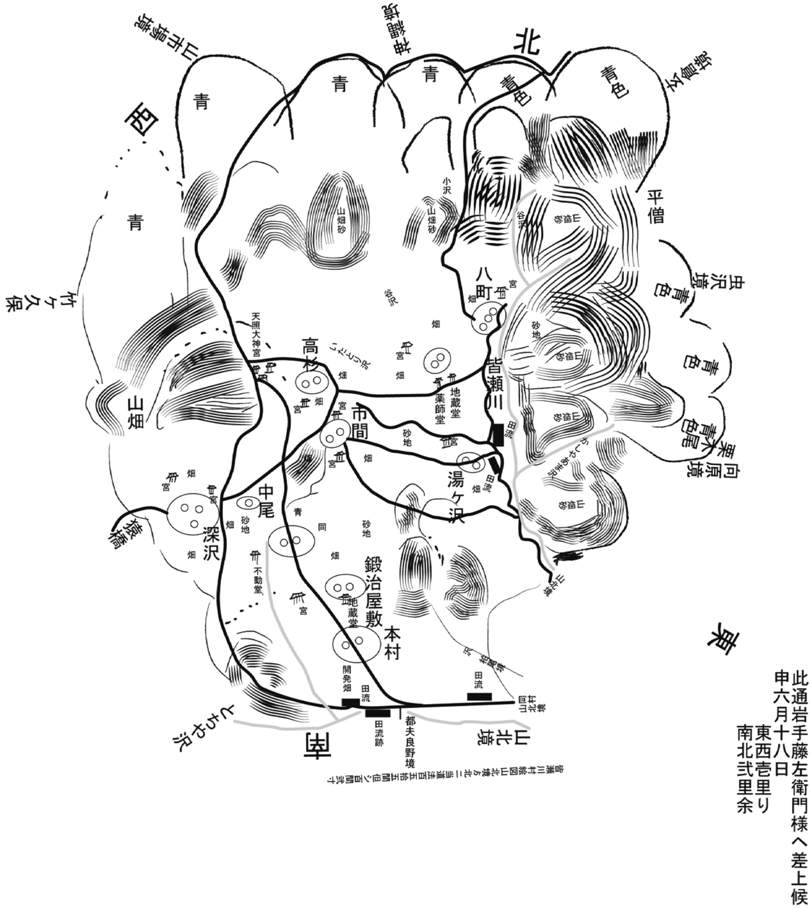
一三年（一七二八）の皆瀬川村絵図（【絵図3】[45]）をみたい。絵図には、「申年六月」の記載はあるものの、作成年は記されていない。しかし、支配代官の岩手藤左衛門に出されていることから、岩手が代官で、申年だったのは享保一三年のみであり、享保一三年六月に作成された絵図だと考えられる[46]。

まず目を引くのは、各集落の周囲に点在する「畑」の文字である。一部、いまだ「砂地」の箇所も見られるが、集落の周りの「畑」は再開発が進んでいたことがわかる。ただし、享保一六年（一七三一）に皆瀬川村他五か村[47]から代官へ出された資料[48]には、「畑方開発之儀も砂之上江少々土を平均シ諸作仕付申候、依之砂降り以来ハ畑作之義年々十分ニハ実成不申」とあり、再開発が完了したといえども、元通りの土地生産力には回復せず、噴火の傷は深かったといえる。「畑」が徐々に再開発される一方で、川沿いに点在する田は「田流」となっている。山の山頂・山腹に目を転じると、「青」「青色」の文字がみえる。【絵図2】では一面黒灰色の世界であったと想定できるが、噴火から二〇年が経ち、山地でも徐々に植生が回復してきたことがうかがえる。【絵図2】では神明社のみの記載であったが、【絵図3】では「地蔵堂」が二つ、「薬師堂」・「天照大神宮」（神明社）・「不動堂」と宮九つが記されていることも興味深い。

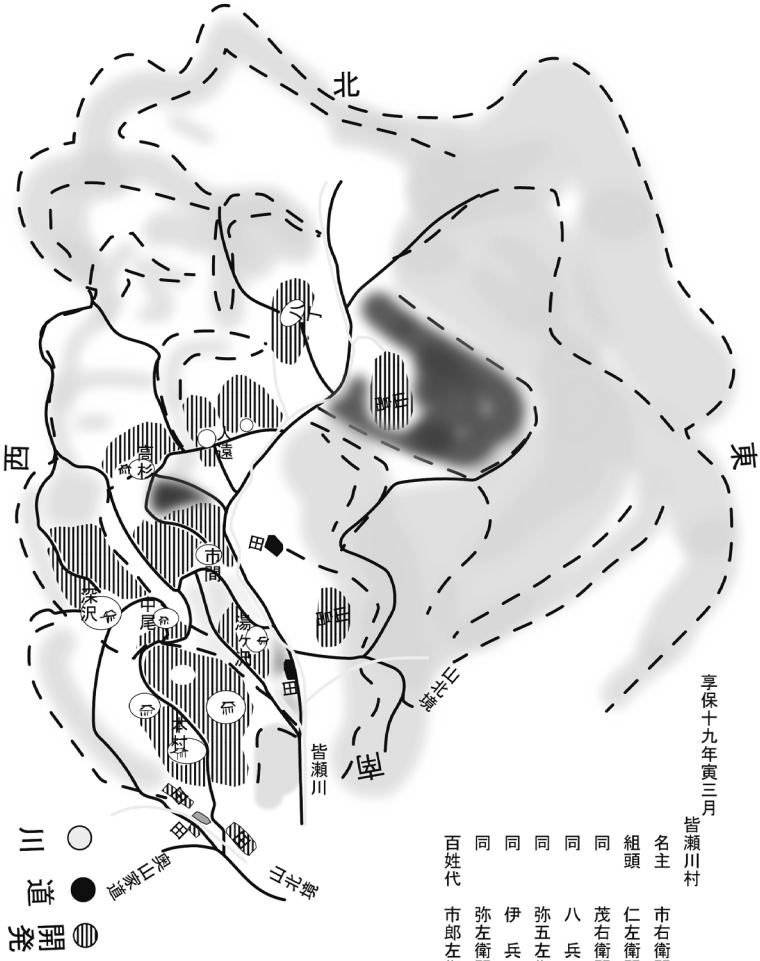
ところで、山畑は「山畑砂」と記載があり、砂埋りを示すような描写がなされ、いまだ再開発が進んでいなかったようだ。しかし、果たして山畑では村民の生業が全く行われていなかったのだろうか。正徳二年（一七一二）二月と思われる代官所からの聞き取り調査への回答文書の下書と思しき資料[49]には、炭の焼き出しについて「前々ゟ内林之竹木ニ而いたし候哉、又ハ山畑等之竹木ニ而いたし候哉之訳ケ御吟味被遊候」との調査があり、村方では「当（皆瀬川村）村之儀（中略）先年砂降以来御田地砂埋ニ罷成御百姓大困窮仕候ニ付当日之稼之儀、右砂埋ニ罷成候山畑ニ連々と竹木等立置申候而数年堅炭又ハ鍛冶炭等ニ仕、当日之渡世漸々相送り候義ニ御座候」と回答した。山畑は、焼畑などは行えていなかった可能性が高いが、「竹木等」を仕立て炭の原料の採取先として機能していたのである。

次に噴火から二七年後の享保一九年（一七三四）の皆瀬川村絵図（【絵図4】[50]）を見たい。【絵図4】では、【絵図3】で「田流」となっていた場所（とちや沢沿い）が、一部「開発」され「田」となっている。また、【絵図3】では、文字のみでわかりづらかったが、集落周縁部の畑の再開発がなされたことが視覚的によくわかる。さらに、【絵図3】で「山畑砂」もしくは「砂地」となっていた場所に「山畠[51]」の文字がみえ、山畑も再開発されていったことがわかる[52]。【絵

絵図 3


北
東
南
西
山中境
峠大通路
平僧
虫沢境
青色
東原境
向原境
竹ケ久保
猿橋
とちや沢
山北境
都夫良野境
高杉
市間
中尾
深沢
湯ケ沢
八町
皆瀬川
鍛治屋敷
本村
天照大神宮
地蔵堂
薬師堂
不動堂
山畑
田流
開発畑
田流跡
此通岩手藤左衛門様へ差上候
申六月十八日
東西壱里り
南北弐里余

絵図 4



享保十九年寅三月
皆瀬川村
名主　市右衛門　㊞
組頭　仁左衛門　㊞
同　茂右衛門　㊞
同　八兵衛　㊞
同　弥五左衛門　㊞
同　伊兵衛　㊞
同　弥左衛門　㊞
百姓代　市郎左衛門　㊞

図4】と同様の形式の絵図が隣村都夫良野村にも残されており[53]、この時期に代官が一律に被災村落の状況を把握するために提出させたのだろうか。

この絵図に関連する帳簿をまとめたものが、【表】である。ここでは、絵図のみではわからなかった各枝郷別の復興状況を大別できる。【表】からは全体の傾向として、おおよそ上畑、中畑、下畑、下々畑、山畑の順で再開発が進められていたことがわかる。一方、各枝郷において再開発の進展度に差もみられる。例えば、枝郷の市間では、「砂埋り」が下畑と下々畑の一部だけなのに対し、枝郷の人遠や八町では上畑や中畑でもまだ十分に再開発がされていない。ここには【絵図3】や【絵図4】で一瞥しただけでは見えてこなかった枝郷ごとの復興状況の差が垣間見える。絵図は他の資料と突き合わせることで、より正確な読み取りが可能となるだろう。絵図を読み解く上で、もう一点気を付けなければならない点がある。それは、山地における植生回復のイメージである。噴火からおよそ二〇年から三〇年経っても、【絵図4】のように一面黒灰色のイメージでよいのかという問題がある。

この点について、【絵図3】と同じく噴火から二一年後の享保一三年（一七二八）に作成された皆瀬川村の隣村の虫沢村絵図（【絵図5】[54]）をみたい。虫沢村でも、屋敷周縁部の畑が再開発されているように、まずは集落の周りから復興に取り掛かったようだ。しかし、虫沢村では、川沿いの一部田畑は未開発であったようで、耕地は灰色に塗られている。屋敷の周りの田畑を優先的に再開発し、火山灰を川沿いに投棄した、もしくは雨により斜面から火山灰が川沿いに流れ込んだことが原因だろうか。この絵図でもっとも注目したいのは、山地の植生描写である。【絵図3】でも山地が「青」「青色」と記されていたが、この絵図でも山地は薄黄緑色で塗られている。加えて、興味深いのは「〒」字型のマークが山地に描かれていることである。後掲の萱沼村絵図（【絵図8】）にもほぼ同様のマークがあり、おそらく樹木を描写したものではないかと考えられる。

このように絵図を相互に比較してみると、この時期には噴火直後のように一面黒灰色というよりも、ある程度山地の植生が回復し、山頂や山腹には樹木や草野が広がる景観を呈していたのではないかと考えられる。噴火後およそ二〇年から三〇年が経過し、村民たちの努力で、集落周辺の田畑が再開発され、山地においても徐々に植生が回復してきた。山畑においても、再開発がなされたり、炭の原料の採取先として活用されたりするなど、その利用が活発化していた。このことは、この時期周辺の萱沼村が、土地生産力がなかなか回復しない中で、「薪商売」に活路を見出

絵図 5

東
西
北
南
大井村境
青梅川村境
大井宿
大井村境
大井村境
大井村境
大井宿
大井宿
大井宿

絵図 6

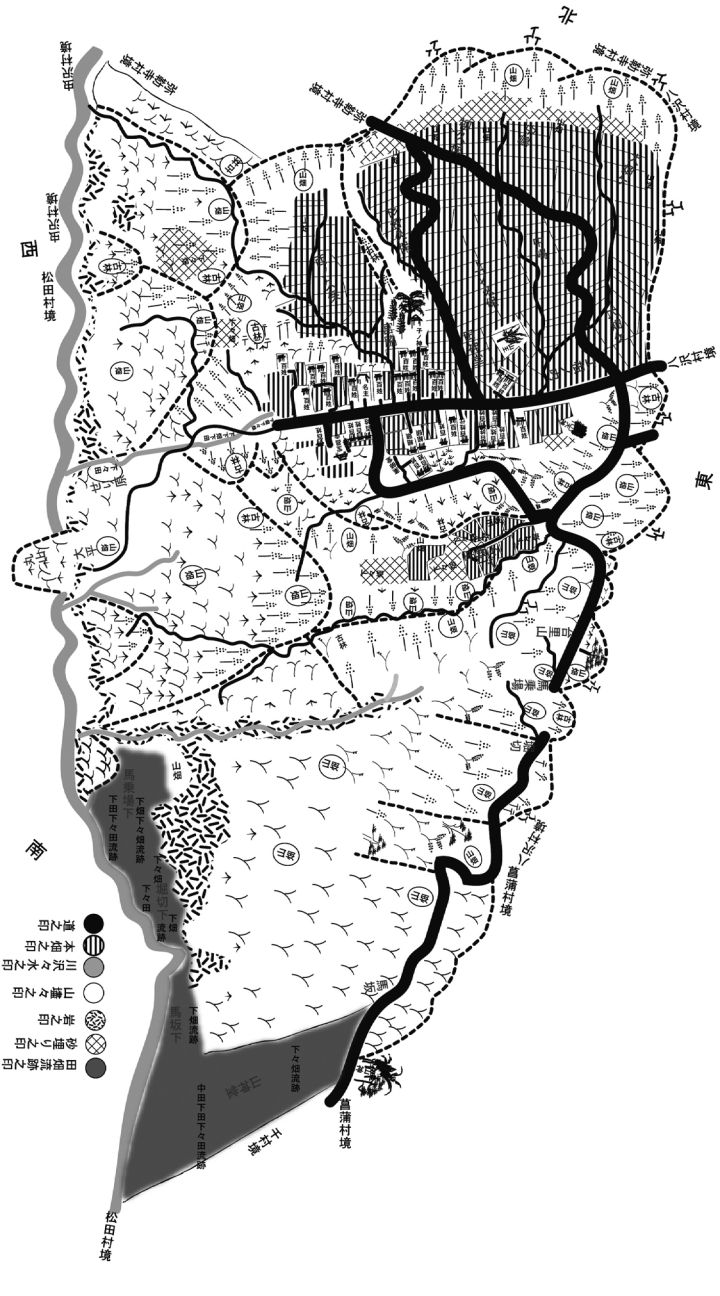

東
北
西
南
松田村境
昌蒲村境
田
畑
桑畑
茶畑
山林
荒地
屋敷
宅地
寺
神社
水路
道路
橋
堤
馬場下
中田下田下々田流路
下々畑流路
下畑流路
下畑下々畑流路
下々畑
下田下々田流路
馬乗場下
山畑
白山

表　享保19年（1734）における皆瀬川村各枝郷における田畑の再開発状況

枝郷名	種別	田畑総反別	地目	反別	川成	砂埋り	開発	備考
鍛冶屋敷	田方	4反5畝歩	中田	2反2畝29歩	1反29歩		1反2畝歩	
			下田	2反10歩	1反4畝19歩		5畝21歩	
			下々田	1畝21歩				川成
	畑方	6町1反6畝6歩	上畑	2町4反2歩	1畝歩	2反3畝26歩	2町9畝6歩	
			中畑	1町4反3歩	1反2畝歩	9畝17歩	1町1反8畝16歩	
			下畑	1町3反5畝1歩	4畝15歩	2反6畝11歩	1町4畝15歩	
			下々畑	6反3畝22歩	6畝24歩	1反1畝25歩	3反5畝3歩	
	屋敷	3反3畝8歩						名主屋敷引5畝歩
	山畑	8反4畝15歩						開発
中尾	畑方	1町3反3畝7歩	上畑	2反8畝29歩	2畝26歩	1反7畝9歩	1反24歩	
			中畑	1反9畝23歩	20歩	1反7畝3歩	2畝歩	
			下畑	2反2畝24歩		2反1畝26歩	1畝28歩	
			下々畑	5反7畝21歩		5反2歩	6畝19歩	
	屋敷	4畝歩						
	山畑	9畝6歩						開発
深沢	畑方	6町3反6畝15歩	上畑	3町4畝2歩	11歩	4畝17歩	2町9反9畝4歩	
			中畑	1町4反25歩	1畝20歩	1反9畝4歩	1町2反1歩	
			下畑	1町2反27歩	3畝8歩	2反1畝25歩	9反5畝24歩	
			下々畑	4反6畝28歩	20歩	9畝12歩	3反6畝26歩	
	屋敷	2反3畝13歩						
	山畑	7反7畝4歩						開発
	山	3畝歩						松兵衛分
市間	下田	3畝8歩						開発
	畑方	3町1反4畝14歩	上畑	1町1反2畝7歩				開発
			中畑	7反3畝2歩				開発
			下畑	9反3畝1歩		1反1畝29歩	8反1畝2歩	
			下々畑	2反8畝10歩		8畝12歩	1反9畝28歩	
	屋敷	7畝24歩						
	山畑	1町4反2畝26歩						開発
	外新田	5畝歩						
湯ケ沢	下田	7畝7歩						川成
	畑方	8反7畝4歩	中畑	6反5畝29歩	4反1畝9歩	2畝歩	2反2畝20歩	
			下畑	9畝3歩	2畝歩		7畝3歩	
			下々畑	6畝18歩	1畝24歩	3畝16歩	1畝6歩	
高杉	畑方	3町4反3畝10歩	上畑	1町2反6畝2歩		2畝2歩	1町1反8畝20歩	
			中畑	4反8畝22歩		4畝1歩	4反4畝21歩	
			下畑	8反5畝28歩	1畝15歩	2反3畝6歩	6反1畝7歩	
			下々畑	6反8畝22歩	3畝17歩	1反5畝6歩	4反9畝29歩	
	屋敷	1反3畝26歩						
	山畑	6反7畝5歩						開発
人遠	田方	5畝歩	下田	2畝20歩				川成
			下々田	2畝10歩				川成
	畑方	2町7反3畝27歩	上畑	6反11歩	1反7畝28歩	1反4畝20歩	2反7畝23歩	
			中畑	6反8畝歩	1反9歩	2反歩	3反7畝29歩	
			下畑	8反1畝3歩	1反6畝10歩	2反6畝26歩	3反7畝27歩	
			下々畑	5反1畝3歩	1反8畝17歩	1反9畝27歩	2反2畝9歩	
	屋敷	1反2畝20歩						
	山畑	2反10歩						開発
八町	畑方	3町4反2畝28歩	上畑	1町2反3畝22歩	3反9畝23歩	2反1畝1歩	6反2畝27歩	
			中畑	9反4畝11歩	9畝20歩	2反6畝歩	5反8畝21歩	
			下畑	6反6畝15歩	9畝1歩	3畝10歩	5反4畝4歩	
			下々畑	4反4畝4歩	4畝28歩	12歩	3反8畝24歩	
	屋敷	1反16歩						
	山畑	4反4畝6歩						開発

※享保19年3月「寅年開発御改并村絵図指出帳」（皆瀬川　井上家文書、横帳286、神奈川県立公文書館寄託）より作成。

していた[55]こととも整合性が付く。

三　入会山をめぐる軋轢

1　萱沼村の景観

ここでは、噴火からおよそ六〇年から七〇年後の絵図が残る萱沼村を事例に、その後の山間村落の景観と、具体的な山地利用の実態について検討したい。まず、噴火から六六年後の安永二年（一七七三）頃に描かれたと思われる萱沼村絵図[56]（【絵図6】[57]）より山間村落の景観に迫りたい。【絵図6】を見ると、「下々畑」の一部や山裾の「山畑」を除き、上畑、中畑などはほとんどが砂除け済みであることがわかる。噴火から一定期間を経て、ようやく本来の村の景観に回復してきた様子がうかがえよう。

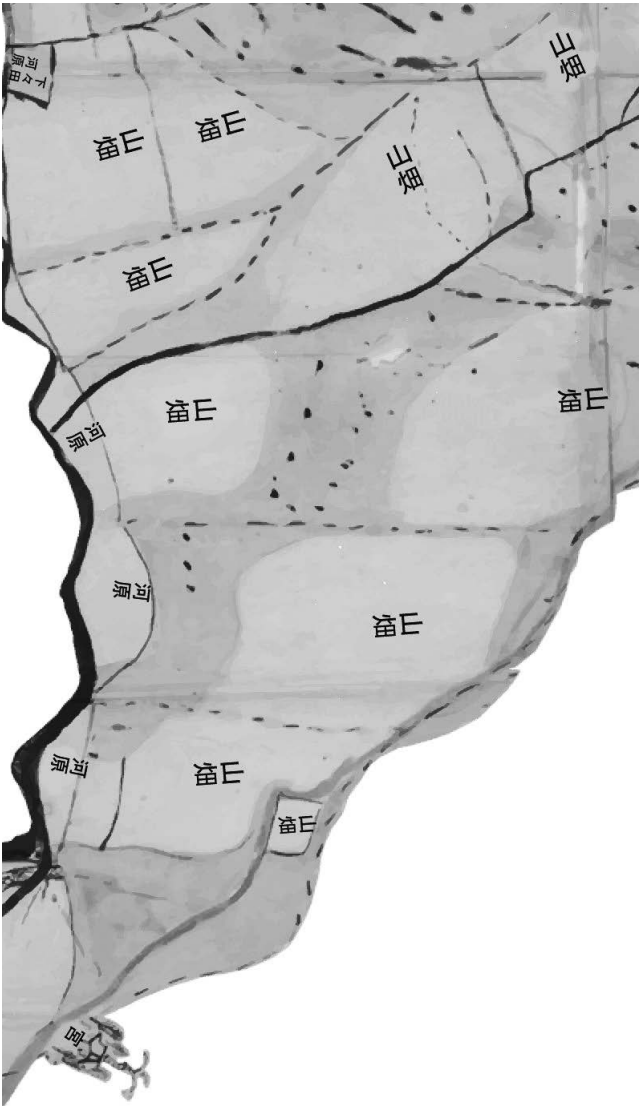
【絵図6】で注目したいのは、絵図に描かれた山地の植生である。萱沼村の山地には、「山畑」や「古林」の文字が点在する。さらに山地をつぶさに観察すると、「⁂—」「⊤」「↑」「ᛉ」など実に多様な構造物が描写されている。局所的には「⁂—」や「↑」だけで描かれている山地もある。描かれた形状だけで判断すれば、「⁂—」「⊤」は樹木、「ᛉ」は草、「↑」は樹木とも草ともとれるだろうか。ただし、こうした描き方の違いが当時の山地の植生を如実に示したものかどうか明確に判断し得る根拠はない。しかし、これほど詳細に描き手による描き分けがされているのならば、何らかの視覚情報をもとに絵図が作成された可能性は極めて高いといえるのではないか。

次に復興状況から安永期頃以前に描かれたと思われる萱沼村絵図（【絵図7】[58]）を見たい。全体的に見て、【絵図6】よりも砂埋り箇所が広範に存在することから、【絵図7】よりも作成年代は古いと考えられる。また、絵図右下に「土手百五十間御願申上候場所」とあることから、土手の普請を願い出た際に作成された絵図とも考えられる[59]。【絵図6】では、【絵図7】に記載のある「新川」ではなく、「古川」の場所を河川が通っていることから、土手の普請が聞き届けられたものと推測できる。【絵図7】において注目すべき点は「山畑」の描かれた方である（【絵図7】の拡大[60]）。【絵図6】ではポイント的に「山畑」とだけ文字で記されていたが、この絵図では面的に「山畑」が表現されている。これは、山地の景観を考える上で重要な問題で、「山畑」は実際にどのような景観を呈していたのだろうか。

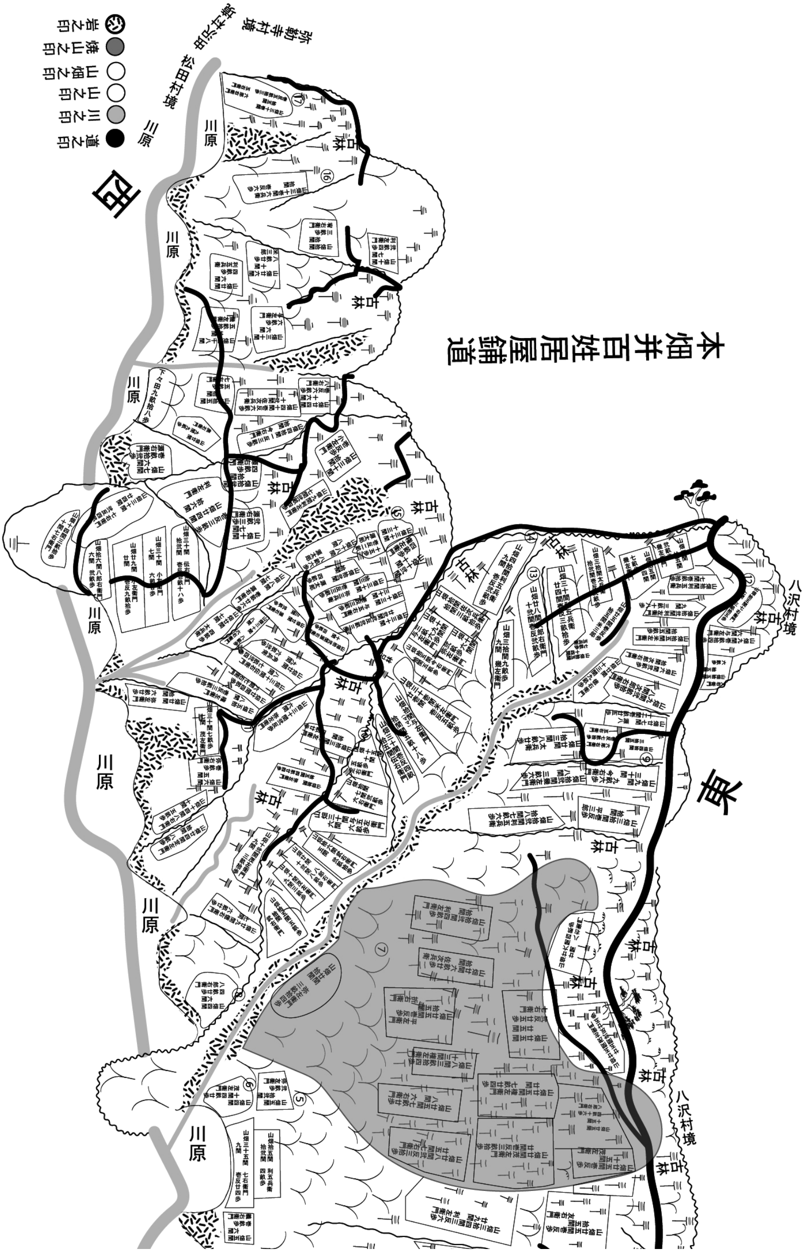
2　山地の景観

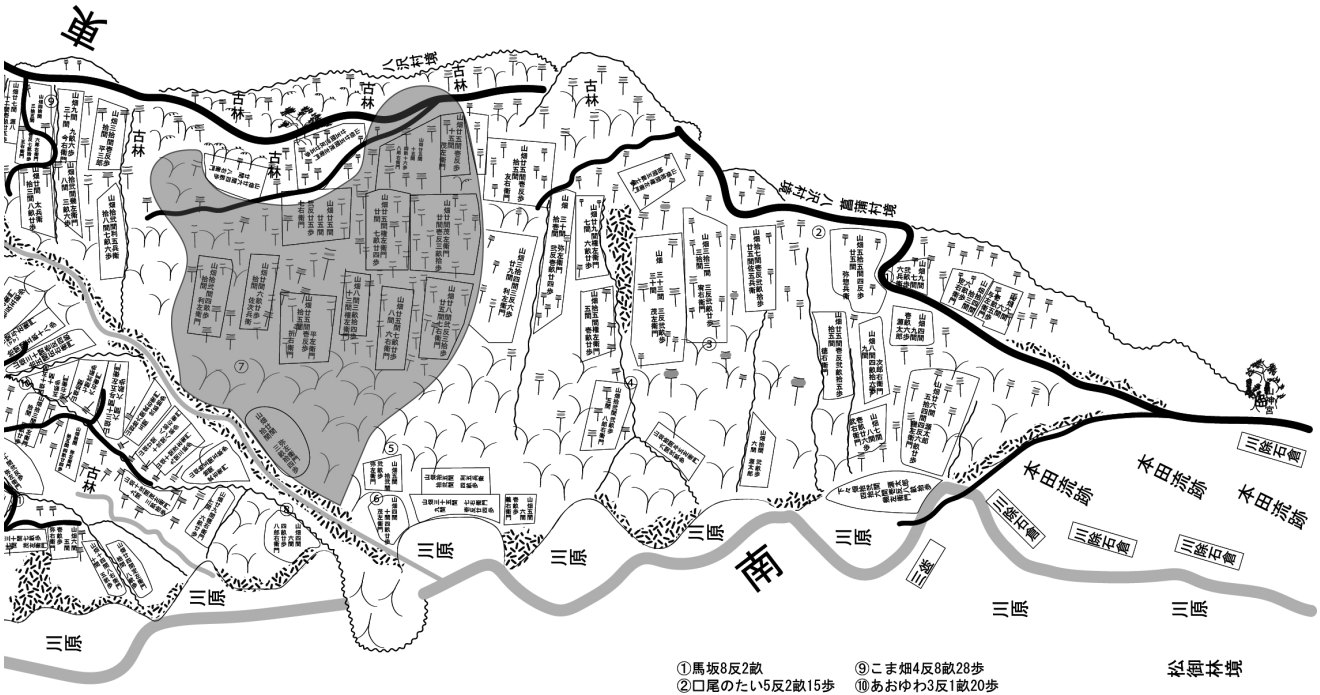
こうした問題に、噴火からおよそ三〇年後の元文二年（一七三七）五月に作成された萱沼村の入会山絵図（【絵図8】[61]）の分析を通して迫りたい。

絵図７の拡大



絵図 8





①馬坂8反2畝
②口尾のたい5反2畝15歩
③堀切1町1反2畝15歩
④堀切下6畝歩
⑤馬のり場下2反2畝14歩
⑥せき口4畝歩
⑦一里山5反6畝歩
⑧がきつか4畝20歩
⑨こま畑4反8畝28歩
⑩あおゆわ3反1畝20歩
⑪しゝこし5反4畝10歩
⑫つかの下5反3畝22歩
⑬くのきかお2反1畝歩
⑭西のやと6反4歩
⑮さる口1町3反1畝12歩
⑯しやくしお1反6歩
⑰大ちらかし1反5畝13歩

この絵図の作成された経緯について簡単に説明しておきたい。[62] 元文二年四月から同三年四月にかけて「山元」の萱沼村と「里」の金子村との間に入会山を巡る争論が発生した。その過程で作成された絵図が【絵図8】である。

争論の発端は、元文二年に金子村が萱沼村の入会山に草木を刈り取るため立ち入ったところ、萱沼村の者たちが来て、金子村の者たちの鎌や鉈を取り上げたことであった。[63] 金子村は再三萱沼村の名主の元へ交渉に向かうが埒が明かず争論に発展した。

金子村の主張[64]は次の通りである。「入会村々困窮仕、人馬等減少故数年入込不申候内、草野茂不残夥敷薪山ニ罷成候」と、噴火後の困窮により数年入り会っていなかったところ、「草野」であった入会山が「薪山」になってしまったという。噴火から三〇年の月日を考えると妥当な主張だろう。さらに、「砂降り已後段々水損ニ而御田屋(亀脱か)敷迄茂砂埋ニ罷成候内、山元之者共幸ニ致夥敷分取新林ニ開置候」と、金子村が噴火に続く酒匂川の氾濫で困窮を極めている間に、「山元」では、「幸」にも「新林」を仕立ててしまったと主張する。また、入会山なのに年貢地（山畑）であるといって草を刈らせないとも述べている。金子村では、「近年少々宛御田地開発仕、漸々村成候様ニ罷成両組(金子村)ニ而馬数弐拾疋餘ニ而苅取候」と、徐々に田地の再開発が進み、減ってしまった馬も二〇匹ほどになったため、秣場として「草野」の需要が高まってきたと考えられる。

一方の萱沼村の主張は主に二点にまとめられる。[65] 一点は、「薪」を金子村の者が刈り取っていたことである。他村の者による薪の刈り取りは、噴火以降土地生産力がなかなか回復しない中で、「薪商売」に活路を見出していた萱沼村[66]にとっては死活問題であった。もう一点は、「野火」の問題である。萱沼村は金子村の者が野火を付けたと主張しており、こちらも「薪商売」を生業としていた萱沼村にとって許しがたい問題であった。萱沼村は、「山元」の「林」は「里方」の「御田地同様」に大切なものであると主張し、金子村との対決姿勢を鮮明にした。

そうした中で、萱沼村によって作成された絵図が【絵図8】である。[67] ここで注目しておきたいのは、山地に点在する「山畑」の存在である。この【絵図8】では、【絵図6】や【絵図7】では把握できなかった「山畑」の実態が浮かび上がってくる。まず押さえたいのは、「山畑」が山地一面にある程度の面積ごとに点在していたということである。実際の山畑は【絵図6】のように小さくポイント的に存在していたものでも、【絵図7】のように山地一面に隈なく存在していたものでもなかったのである。さらに注意深く見ると、「山畑」の周りや「山畑」と「山畑」の間に

は「古林」が描かれているところもある。つまり、実際の山地の状況として、「山畑」と「古林」は入り乱れた状態にあったことがわかる。[68] とくにこの時期は噴火から数十年間「里」の村々が入り会わなかったため、山畑にも多く樹木と考えられる描写（「𝍏」）がなされていることも注目される。[69] 野火が発生した「焼山」の箇所を見ると、ここでも同じく「山畑」の中に樹木が描かれている。樹木は燃えたことを示す赤色で描かれたものと、野火でも燃えなかったのであろうか、他の箇所の山地と同じように黒色で描かれているものもある。金子村が主張したように、入会山となっていた場所の多くが「薪山」（薪にできる樹木が生い茂っていた）状態にあったと考えられる。金子村は野火を付けたことを認めなかったが、こうした樹木を焼いてしまうことで、従来通りの草野の植生に戻そうとしたとも考えられる。一方で、萱沼村は噴火で「里」の村々が入り会わなくなり、樹木への遷移が押しとどめられなくなった入会山を利用し、「薪商売」に活路を見出したものと考えられる。

他方、【絵図8】では「𝍐」のように草地を示すと考えられる描写も散見される。「山畑」と「古林」が入り乱れて存在していることからも、実際の山地の景観としては、「𝍏」のような林地と「𝍐」のような草地の箇所が入り乱れる斑な景観を呈していた可能性が高い。山畑では、一般的に耕作と休閑を繰り返したことから、山畑の休閑期の段階的様相も視野に入れると、数十年単位で山地の景観は変化していたことを想定しておく必要もあるだろう。

噴火から三〇年が経ち、山地の植生が従来以上に遷移していく中で、「山元」と「里」双方の思惑がぶつかり合う場こそ入会山であった。

おわりに

本稿では、絵図とそれに関連する資料の検討を通して、宝永噴火後の山間村落を通時的に分析した。以下、本稿で明らかにした内容を端的にまとめていく。

まず山間村落の噴火後の動向に目を向けた。噴火直後、山間村落では、道の復旧や屋敷周りの畑の再開発を優先的に行い、空間的には居住区からその周縁部へ徐々に再開発を進めていった様相が見て取れた。山間村落において、食料生産を支える畑は生命を維持する上でも最初に再開発の対象となった。取り上げた山間村落は現在でも畑作を営み、歴史的に形成されてきた景観を一部で今も残している。加えて、山間村落では、「砂埋」となった耕地の土地生産力がなかなか回復しない一方で、山地に根差した炭焼き（皆

瀬川村）や薪取り（萱沼村等）などの生業に大きなウエイトを置くようになった。とくに平野部の村々が入り会わなくなった広大な入会山（「山畑」を含む）は貴重な収入源になった。噴火後の山間村落の景観は、噴火直後は一面黒灰色であったが、およそ二〇年から三〇年後には、徐々に山地の植生が回復し、およそ六〇年から七〇年後には、一部耕地に砂埋りの箇所が見られるがほとんど従来通りの景観を回復したといってよい状況が見えてきた。

萱沼村と金子村の入会争論の分析からは、「里」の村々は、噴火やそれ以降の洪水で多大な被害を受けたが、噴火からおよそ三〇年後には、入会山に草木を刈りに来る程度には回復していた様子がわかった。しかし、その間に「薪商売」に活路を見出した山間村落では、入会山の樹木を利用し、それで生計を立てるようになっていた。とくに【絵図8】は、山地の景観を考える上で重要な資料である。従来の山間村落や山地の景観分析は、主に村絵図や広範囲の絵図などを用い、景観の子細にはほとんど立ち入って来なかった。しかし、今回萱沼村の山地を事例に、「山畑」と「古林」が入り乱れた様相で、樹木と草野が混じる斑な景観を呈していたことを指摘した[70]。従来指摘されてきたように近世の山地は、草肥や秣の採取先として利用されるのみならず、山間村落民の生業の場でもあったのである。近世の山地の景観は、「山元」と「里」双方が山地利用を巡りせめぎ合う中で形づくられた可変的なものだった。

今回検討対象とした地域は、噴火災害の被災村落であるという特殊事情もあるため、今後さらに広範囲に山地の景観を検討していく必要がある。また、山畑の休閑期に形成される景観を通時的に検討していく必要もある[71]。御林や百姓持林などの多様な林地を山野争論の絵図や樹種の書上帳などから分析し、近世の人びとがどのような山地景観の中で暮らしていたのか、事例を積み重ねることも重要だろう。その上で、改めて従来指摘されてきたように近世の山地が「草山」の景観を呈していたのか議論する必要性がある。

本稿では、近世前期や後期の分析をできなかった。また、市場構造を組み込んでの分析や「山畑」の利用の実態を村民の生活レベルまで落とし込んで分析できなかった。今後の課題としたい。

註

（1）拙稿「宝永の富士山噴火と山間村落の復興―入会山を巡る問題―」（『人民の歴史学』第二三四号、二〇二二年）。
（2）近年では、中央大学山村研究会編・白水智編集代表『山村は災害をどう乗り越えてきたか―山梨県早川町の古文書・民俗・景観を読み解く―』（小さ子社、二〇二三年）のように、一地域を長期間研究対象とし、災害との関係から読み解いた文理融合の研究成果も出されている。
（3）萬年一剛「古記録・シミュレーションから宝永噴火を再現する」（『富士山学』第三号、二〇二三年）。
（4）小宮雅明「富士山宝永噴火を描いた絵図についての考察」（『神奈川県立博物館研究報告―人文科学―』第三九号、二〇一三年）。
（5）大邑潤三「ＧＩＳのジオリファレンス機能を用いた近世村絵図の分析―富士山宝永噴火からの復興を事例として―」（『西洋史学』第二七一号、二〇二一年）。
（6）水本邦彦『日本史リブレット52　草山の語る近世』（吉川弘文館、二〇〇三年）、同「近世の自然と社会」（歴史学研究会・日本史研究会編『日本史講座6近世社会』東京大学出版会、二〇〇五年）、同「江戸時代の山野と草肥農業」（群馬歴史民俗研究会編『歴史・民俗からみた環境と暮らし』岩田書院、二〇一四年）。
（7）早田旅人「近世丹沢山地の景観と環境」（平塚市博物館研究報告『自然と文化』第四三号、二〇二〇年）。
（8）米家泰作『中・近世山村の景観と構造』（校倉書房、二〇〇二年）。
（9）吉田ゆり子「コメント　絵図からみた暮らしの景観」（『飯田市歴史研究所　年報』第二〇号、二〇二二年）。
（10）後藤雅知「丘陵地帯の村と山」（『歴史評論』第八二五号、二〇一九年）。
（11）前掲註（1）一五頁の地図を参照。
（12）旧萱沼村安藤家文書で使用する資料番号及び表題は、『神奈川県史資料所在目録―松田町―』第二一集（県史編集室、一九七一年）による。
（13）虫沢区有文書で使用する資料番号及び表題は、前掲註（12）による。
（14）旧中山村川口家文書で使用する資料番号及び表題は、『松田町古文書所在目録』（松田町教育委員会、一九八〇年）による。
（15）旧宇津茂村大舘家文書で使用する資料番号及び表題は、前掲註（14）による。
（16）旧皆瀬川村井上家文書で使用する資料番号及び表題は、『神奈川県古文書資料所在目録　第一二集』（神奈川県立文化資料館、一九八九年）による。
（17）前掲註（1）。
（18）以下、永原慶二『富士山宝永大爆発』（集英社、二〇〇二年）に基づく記述。
（19）幕領上知後の支配代官については、前掲註（1）一六頁【表1】を参照。
（20）皆瀬川村の状況以外は、前掲註（1）で詳細に検討したものを簡潔にまとめている。
（21）宝永四年一二月「此度富士山焼申候ニ付石砂降見分帳」（萱沼　安藤家文書、冊水利・普請一、神奈川県立公文書館）、以下、旧村名、所蔵先を略す。

(22) 宝永六年五月「（亥砂降ニ付酒匂役所より受取候金米銭書付）」（中山　川口家文書、近世三、個人蔵）。
(23) 前掲註（1）一八頁【グラフ】を参照。
(24) 火山灰の除去は、単に田畑の上部に積もった火山灰を撤去するという方法以外に、いくつかの方法をもって行われた。例えば、天地返しといって、耕作土（地）と火山灰（天）を入れ替える方法や、火山灰と耕作土を攪拌する方法（資料文言では「うなへくるミ」と表現されていると考えられている）などがとられた（天野憲一「秦野地方における富士山宝永大噴火と被害」（『江戸遺跡研究』第四号、二〇一七年）。いずれの方法でも、田畑は砂地となり、地力の回復には相当の年月を要したと考えられる。
(25) 都夫良野村、湯触村、川西村、山市場村、神縄村。
(26) 『山北町史史料編近世』（山北町、二〇〇三年）七一四頁、〈都夫良野　岩本宜夫家文書〉。
(27) 宝永七年「（前欠）（富士山噴火による砂積に付、川除普請仰付願）」（皆瀬川　井上家文書、状水利・普請二、神奈川県立公文書館寄託）。以下、旧村名、所蔵先を略す。
(28) 宝永五年二月「皆瀬川村飢人書上帳」（井上家文書、横帳一三九）、『山北町史史料編近世』六五三頁に所収。
(29) 宝永七年四月「四ケ村乍恐書付を以御慈悲奉願上候御事（田畑土地悪故につき百姓難儀についてその他）」（菖蒲　須藤家文書、状村況五、はだの歴史博物館所蔵の『秦野市史』作成時の紙焼き資料を利用、原本個人蔵）、『秦野市史第三巻近世史料二』（秦野市、一九八三年）四三八～四三九頁に所収。
(30) 本稿は、二〇二三年六月一七日に立教大学史学会大会講演会（以下、大会）「日本近世の生業・暮らしと文化的景観」で報告した内容を基に成稿している。大会では、Google ドライブで事前に資料が配信されたことから、カラーのトレース絵図を用いた。カラーのトレース絵図は、まず原資料を Adobe Photoshop で読み込み、背景や破損個所を無地にしたり、文字が書かれた部分に色の修正を加えたりした。その後、Adobe Illustrator にできあがった下図を読み込み、画像トレース機能を用いてトレースし、トレースした下図に翻刻した文字を挿入した。カラーのトレース絵図作成にあたり、『ひらつかの村絵図を読む』（平塚市博物館、二〇一七年）、根本佐智子「神奈川県立歴史博物館所蔵七沢村と煤ケ谷村田畑境并山論裁許絵図」（『神奈川県立博物館研究報告―人文科学―』第四九号、二〇二二年）、渡邊浩貴「石見国長野荘俣賀氏の本拠景観と生業・紛争」（『国立歴史民俗博物館研究報告』第二一二集、二〇一八年）、同「湧水は中世景観を語れるか―滋賀県甲賀市水口町の現地調査と山中氏両惣領家―」（『民衆史研究』第一〇一号、二〇二一年）、山本智代「白山麓一八ケ村村絵図集」（佐藤洋一郎監修、原田信男・鞍田崇編『焼畑の環境学―いま焼畑とは―』思文閣出版、二〇一一年）などに収録の絵図や地図を参考にした。作画にあたっては、より原資料の筆致を残すため、高解像度トレースを用いた結果、虫損箇所や絵図の折り目や影なども反映されてしまった。今後の課題としたい。一方、本誌掲載にあたり、大会で示したカラーのトレース絵図ではグレースケールになってしまう関係上、子細がわかりづらくなってしまうため、大幅に絵図のトレース方法を改変した。原資料から改変した箇所については、それぞれの絵

図のところで説明を付した。基本的に道を黒色、川を薄灰色、畑を横線等で示した。トレースに際して、一つ一つブラシツール等を用いて描くなど極力原資料の筆致に近づけたが、十分に表現できていない箇所もある。今後の課題としたい。また、グレースケールのトレース絵図作成にあたり、『南足柄市史資料編二近世（一）』（南足柄市、一九八八年）、前掲註（10）などに収録の絵図を参考にした。

(31) 天保五年四月「皆瀬川村道、川、田、畑、山色別地図」（井上家文書、状絵図一〇）。道を表す赤色を黒色、川を表す青色を薄灰色、田を表す黄色を黒点、畑を表す茶色を横線、山を表す黄緑色を灰色で示した。下図は Illustrator を用いてグレースケールでトレースした。

(32) （宝永七年か）「絵図（相模国足柄上郡皆瀬川村東西江壱里半南北江弐里半）」（井上家文書、状絵図三八）。道を表す橙色を黒色、川を表す薄水色を薄灰色で示した。下図は Illustrator を用いてグレースケールでトレースした。

(33) ともに『秦野市史第二巻近世史料一』（秦野市、一九八二年）に収録。

(34) 『富士山大噴火―宝永の「砂降り」と神奈川―』（神奈川県立歴史博物館、二〇〇六年）六〇頁。

(35) 『江戸時代がみえるやまきたの絵図』（山北町史編さん室、一九九九年）、前掲註（34）でも取り上げられていない。

(36) 宝永七年「（前欠）（富士山噴火による砂積に付、川除普請仰付願）」（井上家文書、状水利・普請二）。

(37) 川村山北、都夫良野村、湯触村、川西村、山市場村、神縄村、世附（よつ）村、中川（なかがわ）村、玄倉村。

(38) 宝永七年五月「奥山家往還道御普請人足積り」（井上家文書、冊二一）、『山北町史史料編近世』六九八～七〇一頁に所収。

(39) 宝永四年一二月「乍恐書付を以御注進申上候御事（富士の石砂降るにより別道通り願）」（井上家文書、状支配・村政五四）、『山北町史史料編近世』五八四頁に所収。

(40) 宝永六年一二月「乍恐書付を以奉願上候御事（亥冬石砂降りにより炭運通路変更願）」（井上家文書、状林野七）、『山北町史史料編近世』六九四～六九五頁に所収。

(41) 宝永六年一二月「乍恐書付を以奉願上候御事（亥冬石砂降りに付炭差出免除願）」（井上家文書、状林野八）。なお、目録の表題は資料内容を誤って記載している。

(42) 宝永六年一一月八日より始まった皆瀬川瀬替（堀割）工事のことか（『山北町史史料編近世』六九四頁）。

(43) 宝永七年四月「覚（炭焼商売願）」（井上家文書、状林野九）、『山北町史史料編近世』六九五～六九六頁に所収。

(44) 『山北町史史料編近世』六七〇～六七一頁、（都夫良野岩本宜夫家文書）。

(45) （享保一三年）申年六月「皆瀬川村絵図（山北ゟ北ニ当ル道法百五拾五間但シ百間弐寸）」（井上家文書、状絵図三五）。道を表す橙色を黒色、川を表す薄茶色を薄灰色で示した。

(46) 前掲註（34）六三頁、大脇良夫「富士山宝永大噴火で埋まった約三〇〇年前の皆瀬川村の村況絵図（現在の神奈川県足柄上郡山北町皆瀬川地区）」（『そんぽ予防時報』第二三九号、二〇〇九年）。大脇によってこの絵図の概略が紹介されている。

(47) 前掲註（25）に同じ。

(48) 『山北町史史料編近世』七四四～七四五頁、（都夫良野

岩本宜夫家文書）。

(49)〔正徳二年（一七一二）〕辰二月「乍恐書付を以申上候御事（砂降り以来困窮ニ而炭焼困難ニ付）」（井上家文書、状林野一〇）。

(50) 享保一九年三月「皆瀬川村開発地絵図」（井上家文書、状絵図三）。道を表す赤色を黒色、川を表す茶色を薄灰色、開発された場所を表す黄色を横線で示した。

(51) ここでは、今のところ「山畠」も「山畑」も同義で使用されていると考えている。

(52) この場所が再開発された理由として、後年の入会山争論の際に作成された資料〔（安政二～三年）「色別入会山の絵図（彩色）」（井上家文書、状絵図三二）〕には、「此北ハ外々ゟ地所よろしき訳ヶ所ニ而作物みのりよろしき所なり」「是ハ人や道間ぢかき候所ニ而し、さるとりつば（ママ）たもいでずよろしき所」とある。作物の実りも豊かで、鳥獣被害に遭いにくい地所の良い場所が優先的に再開発されたことがわかる。

(53) 前掲註（35）一八頁。

(54) 享保一三年六月「相模国足柄上郡虫沢村絵図」〔虫沢地区区有文書、状村況（絵図）二〕。道を表す赤色を黒色、川を表す茶色を薄灰色、畑を表す茶色を横線、「田畑砂埋」を表す灰色を菱形で示した。輪郭線で囲まれた山地は薄黄緑色で色付けがなされているが、見やすさを考えて色付けはしなかった。「切替山畑跡」付近のやや濃い灰色で示した箇所は、濃い黄緑色で塗られたところである。なお、原図では、凡例のところに色付けはなされていない。この絵図も【絵図3】と同様に享保一三年六月に岩手藤左衛門宛てに出されており、この時期にも一律に被災村落の状況を把握する目的で村々に絵図の提出が求められたものと考えられる。

(55) 前掲註（1）。

(56) 絵図裏面に名主弥惣兵衛、組頭太兵衛、同善左衛門、同儀右衛門、百姓代徳左衛門の名前があり、この四名の組合せは、例えば、安永二年七月「屋敷（反別）御改書上ケ帳」（安藤家文書、冊土地二）などに見られるため、絵図も前後で作成されたものと考えられる。近隣の宇津茂村にも安永二年六月作成の絵図〔安永二年六月「（宇津茂村村絵図）」（宇津茂　大舘家文書、一三、個人蔵）、以下旧村名・所蔵先を略す〕が残り、この絵図とほぼ同様の山地の描かれ方がなされていることから、ほぼ同時期に作成されたものと推定した。

(57)（安永二年か）「相模国萱沼村絵図」（安藤家文書、状絵図一四、前掲註（12）の目録には記載なし）。道を表す赤色を黒色、川や沢を表す水色を薄灰色、畑を表す薄黄色を横線、「砂埋り」を表す灰色を菱形、岩を表す茶色をカプセル状、「田畑流跡」を表す無色を濃い灰色で示した。輪郭線（点線で表した）で囲まれた山地は薄黄緑色で色付けがなされているが、見やすさを考えて色付けはしなかった。原図の小字は赤色で書かれている。

(58)（安永期以前）「御普請所絵図」（安藤家文書、状絵図一二）。本稿では拡大画像のみ収録した。

(59) これに関連する資料は享保一八年四月「乍恐書付ヲ以奉願上候御事（捨置之田地之ため百姓共困窮ニ付開発之川除普請願）」（安藤家文書、状村況三）か。

(60) 拡大図右下にある「宮」が【絵図6】の右下の「山神」

である。

(61) 元文二年五月「絵図（本畑并百姓居屋鋪道）」（安藤家文書、状絵図一）。道を表す赤色を黒色、川を表す薄茶色を薄灰色、山畑を表す黄色を囲み枠、「焼山」を表す灰色を濃い灰色、岩を表す茶色をカプセル状で示した。輪郭線で囲まれた山地は薄黄緑色で色付けがなされているが、見やすさを考えて色付けはしなかった。

(62) 詳細及び転末については、前掲註（1）参照。

(63) 元文二年四月「乍恐以書付奉願上候」（安藤家文書、状林野七）。

(64) 以下、前掲註（63）に基づく記述。

(65) 以下、元文二年七月「乍恐返答書ヲ以申上候御事（入会山ニ而薪苅之一件）」（安藤家文書、状林野八）に基づく記述。

(66) なお、噴火以前の萱沼村でも、寛文一〇年（一六七〇）の村鑑に「百姓所作ニハ作之間ニ真木伐、小田原・大磯・須賀迄付出シ商買仕候」（青山孝慈・青山京子編『相模国村明細帳集成　第三巻』（岩田書院、二〇〇一年）No.一二、四三二頁、〈弥勒寺　飯田弥十郎家文書〉）とあり、「真木伐」が生業の一つであったが、噴火後はそのウエイトが一層高まったものと思われる。

(67) 絵図が作成されたのは、元文二年五月であるため、前掲註（63）の金子村の主張を受けて、萱沼村が作成したものと考えられる。

(68) 同様に山地に山畑が点在するように描かれた絵図に（元禄期）「虫沢入会山絵図（絵図）」（金手　酒井家文書、三、報徳博物館所蔵）がある。

(69) 本来山畑でどのような作物が生産されていたのかも重要な問題となるが、明治四年一二月「相模国足柄上郡萱沼村明細帳」（安藤家文書、冊村況一〇）には、主な作物の生産高として、大麦二二八俵、小麦九五俵、菜種七六俵、大豆七〇俵、小豆一〇俵、粟一五〇俵、稗七六俵、蕎麦一五俵、芋一〇〇〇俵、煙草三八〇両が書き上げられる。昭和四五年（一九七〇）に行われた民俗調査では、宇津茂地区の明治・大正生まれの話者から、「ヤキハタ」「キリカエ畑」の名称があり、稗や小豆などの直播や里芋の作付けが行われたことが聞き取られている（『足柄地区民俗資料調査報告書（一）』（神奈川県教育委員会、一九七一年）。昭和五四年度（一九七九）に寄地区（旧東山家七か村の弥勒寺村、土佐原村、宇津茂村、大寺村、中山村、虫沢村、萱沼村）を対象に行われた民俗調査でも「アラク」「キリカエバタ」の名称が聞き取られており、焼畑地では、ハンノキを炭焼き用に一〇年から一三年育て、その後焼き、粟や里芋などを植え、数年耕作したところで、再びハンノキを植える方法がとられたという（『足柄の民俗（Ⅱ）―足柄上郡松田町―』（神奈川県立博物館、一九八五年）。以上を鑑みれば、山畑では粟や稗などの雑穀や小豆・里芋などの生産が行われ、耕作と休閑が繰り返されていたと考えられる。休閑期に育った木を炭焼きや薪取りに利用することもあっただろう。当地域の山畑で実際にどのような耕作が行われていたかを示す資料は誠に少ないが、年未詳だが近世期の資料に、砂埋りになっている山畑を「開発仕二三ヶ年茂相作、其跡江植木仕拾五年ケ弐拾年目苅畑ニ仕候而又二三ケ年茂作り申候ハヽ、其場所之山畑御年貢為上納之可相成与存」（年未詳）「義定連判状之事（宝永砂埋の山畑二十三軒に割合開発）」（大

舘家文書、二八四〕とあり、上記の聞き取り調査を裏付け得る。

(70) 同様の山地の景観は近隣の宇津茂村の絵図でも見られ、「山畑」に樹木と思しき構造物も描かれている〔元文三年三月「（宇津茂村絵図）」（大舘家文書、六）〕。

(71) 山本智代は加賀国白山麓地域を分析し、三年から五年の焼畑耕作の後、休閑地は杉などの山林に仕立てられたことを、絵図の検討を通して指摘している〔山本智代「白山麓一八ヶ村とむつし関係史料について」（佐藤洋一郎監修、原田信男・鞍田崇編『焼畑の環境学―いま焼畑とは―』思文閣出版、二〇一一年）〕。

（神奈川県立足柄高等学校教諭）